

◆幹事より

木島竜吾

幹事（岐阜大学）

第8回大会が終わり、岐阜は急に秋になりました。既に会期中のにぎわいが懐かしい気持ちになります。

岐阜大会を運営、開催するにあたり、個人的に最も心配していたことは、発表数、来場者数でした。参加者の方々には、岐阜駅周辺の活力や規模を感じていただけたかと思いますが、例えば昨年の会場へのターミナルである東京新橋駅の一日乗降客数約100万、来年の京都駅の約60万人と比較しても、JR岐阜駅は約5万人と、規模的には比較になりません（日本一は新宿の440万人だそうです）。そのために、アクセスの良い岐阜駅近隣で開催すること、プレ懇親会等に特色を出して魅力を増すことなどの工夫をこらし、そのかいあってか、講演発表件数、来場者数ともに、過去最多となりました。また、それらのイベントもおおむね好評であったとの感触を得ており、まずはほっとしています。

今回は、岐阜大学の教官だけではなく、名工大など近隣の大学、特色あるメディアアートの学校であるIAMAS、及び産業施策の面からVR全般にバックアップをいただいている岐阜県の総合力によって開催が可能となったと思います。また、学会事務局、協賛企業にも、人的な面を含め、多大な御協力をいただきました。参加者の皆さんと、御協力頂いた皆さんに心より感謝いたします。

◆プログラム担当より

山田宏尚

プログラム副委員長（岐阜大学）

今大会は、どちらかといえば地方の部類に入る岐阜の地での開催ということで、当初は十分な講演数が集まるのかどうか心配されたが、ふたを開けてみると予想を上回る179件もの発表が集まり、盛況のうちに終わることができ、ほっとしている。

講演数が多かったことから、従来の3室並行でプログラムを組んでみると、スケジュール的にかなり厳しいことが分かり、最終的には部分的に並行4セッションとすることで何とか対応できた。当初は3室並行を念頭に部屋割りを考えていたため、受付のための部屋を途中から講演会場

として使うことになり、事務局の方にはご迷惑をおかけすることになってしまったが、皆様のご協力ですべてのセッションを無事に終わることができた。発表件数は年々増加の傾向にあるようなので、今後はあらかじめ部屋数に余裕を持って準備を進める必要があるものと思われる。

さて、プログラム委員会の重要な仕事に、セッション振り分け作業があるが、これは第3希望までの希望セッションのデータがあったため、エクセルのソート機能を使って比較的効率的に構成できた。しかし、実際にプログラムを組んでみると、座長や講演者の希望調整などの細かい作業がいくつか生じた。これについては、大会幹事の木島先生および大会事務局の貞岡さんのご協力で何とか対応することができた。また、研究委員会よりプログラム委員会に加わって頂いた皆様、学会事務局の田中さんをはじめとするスタッフの方々には大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。



発表会場の様子

◆機器展示担当より

望月 茂

機器展示担当（ソリッドレイ研究所）

第8回岐阜大会は3月から、実行委員会の本格的な活動がスタートし、4月以降は毎月1回の定例委員会となりました。仕事との兼ね合いや距離的な問題もあり、毎回出席とはいきませんでした。企業展示の活動としては、会場の下見から始まり、5月中の出展案内送付先企業のリストアップ、6月初旬の案内状の送付という流れで進りました。さらに、6月下旬に行われた産業用バーチャルリアリティ展(IVR2003)で、大会長の川崎先生、幹事の木島先生と各企業ブースへ直接誘致活動を行いました。7月上旬より、企業からの申し込みが始まったものの、予想

以上に出足が悪く、下旬になっても、まだ10社に満たない状況で、どうなることかと気を揉みましたが、8月の締め切り間際に申し込みが相次ぎ、また地元岐阜県の企業の出展もあって最終的に15社・団体となりました。

今回の会場である「ぼるるプラザ岐阜」は、JR岐阜駅前に位置し、交通の便の良さ、懇親会会場や周辺商業施設への利便性の良さを兼ね備えた施設でした。企業展示コーナーは、会議室を1部屋使用することができ、ブースのレイアウトにも頭を悩ますことなく、また電気工事などの設営作業も順調に行われました。

今回の展示では、ロボット関連企業やグラフィックボード関連企業の初出展があり、また製品としては、裸眼3Dディスプレイが3社で同時に展示されて注目を集めました。期間中は、晴天にも恵まれ、大会運営も滞りなく順調に行われました。企業展示コーナーも昼休みを中心に、来場者で賑わいましたが、一つだけ残念だったのは、セッション数の増加や懇親会などのスケジュールの関係で、展示コアタイムが実質無くなってしまったことです。次回京都大会ではなんとか時間を確保していただきたいと思います。

最後になりましたが、大会長の川崎先生、幹事の木島先生、総務の原先生、会場担当の山田さん、懇親会担当の平湯さん、そして私と一緒に展示を担当され、地元企業を取りまとめていただいた岐阜県の大野さんをはじめ、大会実行委員の皆様にご挨拶を申し上げます。



機器展示会場の様子

◆作品・技術展示担当より

山田俊郎

作品・技術展示担当（岐阜県生産情報技術研究所）

今回の大会では、大会会場の隣で岐阜駅に隣接した「匠ミュージアム」という小ホールで展示が行われ、招待展示1件、技術展示8件、作品展示9件の合計18件の出

展があり、例年の倍近い数であった。大会参加者のみでなく、一般にも開放された展示であったため、場所柄から駅利用者の関心を集め、一般見学者も多く訪れていた。

今年の展示の特徴としては、岐阜県の情報科学芸術大学院大学(IAMAS)から招待展示を含む9件の出展があり、技術展示が多い従来の大会とは違った雰囲気になった。招待展示として、IAMASの客員アーティストのウォルフガングミュンヒ氏の「おぼけ」という作品が展示され、プロジェクトで投影されたまきにおぼけのようなキャラクターが体験者の影によってインタラクティブに動き回る、不思議な映像が投影されていた。「beginning」という水の中に映像が浮かぶ作品では、水の透明感と映像の結像という相反する条件を満たすため、水の中に少量の高分子不純物を混ぜるなど、技術的な工夫がある作品も多く見られた。そのほかでは、パソコン間で画像を共有する作品や箱型のディスプレイの組み合わせによって映像が変わる作品、変り種では、月の満ち欠け、潮の満ち引きによって明るさの変わる作品など、メディアアートの実験場のような作品展示がなされていた。また、IAMAS以外の作品展示では、毎年出展されている串山先生が弾力のある感圧センサを液晶モニタの上に貼ったデバイスを使って、水滴を操作するような作品を出展された。

技術展示では、筑波大学の「CirculaFloor」が会場の1/4ほどの面積を占有してひととき目立っていた。この研究は複数台の移動台車を用いたロコモーションインタフェースであり、ガジェット好きな大会参加者の関心を集めていた。また、ワイヤテンション型のハプティックデバイスである「SPIDAR」を10KHzのサーボループで制御する展示では、展示自体は地味ながらも、これまでの感覚提示とは違うレベルの硬さ再現がSPIDARで可能であることを示し、SPIDARの研究が新しい局面に入ったことをアピールしていた。このほかにも興味深い出展



作品・技術展示の様子